

第1章 うるま市の概要

1. 自然的・地理的環境

(1) うるま市の位置・面積

沖縄本島は、北の九州と南の台湾のほぼ中間に位置する。うるま市は、沖縄本島の中部の東海岸にあつて、県庁所在地那覇市から北東へ約 28 k m の距離にある。本市の北側には金武町と恩納村、西側から南側にかけて嘉手納町、沖縄市と隣接する。市の北側は石川地区、中部は具志川地区、南東側は勝連地区と与那城地区の区域がある。南東側には勝連半島があり、東側に金武湾、南側に中城湾を有する。同区域の海上には有人・無人の8島があり、伊計島、宮城島、平安座島、浜比嘉島、藪地島の5島は海中道路や架橋によって結ばれている。また、沖縄本島中部で唯一の有人離島の津堅島もある。

うるま市役所は具志川地区にある。

国土地理院の『令和3年全国都道府県市町村別面積調』(国土地理院技術資料 E2-No.74、2021年10月)によると、うるま市の総面積は 87.02 k m² である。うるま市役所の場所は数値的に表すと経度 127°51'305"、緯度 26°22'435" である。市の範囲は以下のとおりである。

東端	経度 128°00'15"	緯度 26°23'56"
西端	経度 127°47'17"	緯度 26°25'14"
南端	経度 127°56'34"	緯度 26°14'29"
北端	経度 127°49'51"	緯度 26°27'0"

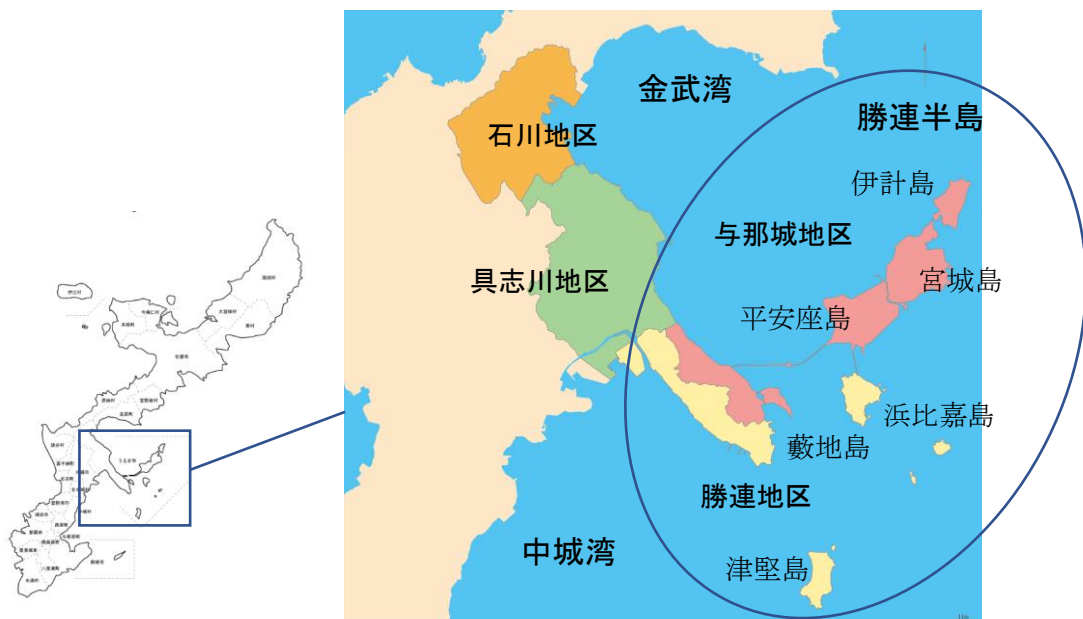


図3 うるま市の位置



石川岳



赤道付近のカルスト残丘

(2) 地名

うるま市は2005（平成17）年4月1日に旧石川市、旧具志川市、旧勝連町、旧与那城町が合併し、誕生した自治体である。その新市の名称は「うるま（珊瑚・さんご）の島という昔から沖縄を指す美称」とした。

近世より続く石川、具志川、勝連、与那城は間切（行政単位の村）や集落の名称として『おもしろさうし』と首里王府等の史料より確認できるが詳しい地名の由来は不明となっている。

うるま市の半島は勝連半島や与勝半島と呼ばれている。1894（明治27）年に黒岩恒は「沖縄島に就て」（『地質学雑誌』第1巻第4号、日本地質学会、1894年、172頁）のなかで、初めて勝連半島と名づけた。また、『琉球新報』2面に「与勝半島通信」という記事からみて、当時は与那城間切と勝連間切をあわせた名称であったと考えられる（沖縄県教育庁文化課史料編集班編、『沖縄県史 資料編 24 自然環境新聞資料 自然環境2』、沖縄県教育委員会、2014年、63頁）。与勝の与は与那城であり、その勝は勝連を意味した。

(3) 地形・地質

市の北側に位置する石川地区は標高204.2mの石川岳があり、その山脈と低地をもち、地質はヤンバル特有の名護層と国頭礫層（嘉陽層）を持っている。また、河川としては二級河川の石川川もあり延長2.7km、流域面積10.31km²である。石川集落は低地であるため、湿地と水田が豊富な環境である。それ以外の伊波、山城、嘉手苺、東恩納の集落は山林が多く残されている。石川地区は山と川と湿地がありながら東側に金武湾である。

具志川地区は市の中央に位置している。石川地区のような岳はないものの喜屋武マープ（丘陵地）は標高110.4mであり、金武湾と中城湾を見下ろすことができる。とくに顕著な自然環境は赤道、兼箇段、天願、宇堅などの集落の周辺がカルスト残丘（地形）であり、県内でも珍しい景観を保っている。その地質は、天願構造線を境にして形成している。その構造線より北側の地層は名護層と国頭礫層（嘉陽層）であり、南側は青灰色でシルト質の泥岩と琉球石灰岩が重なっている。

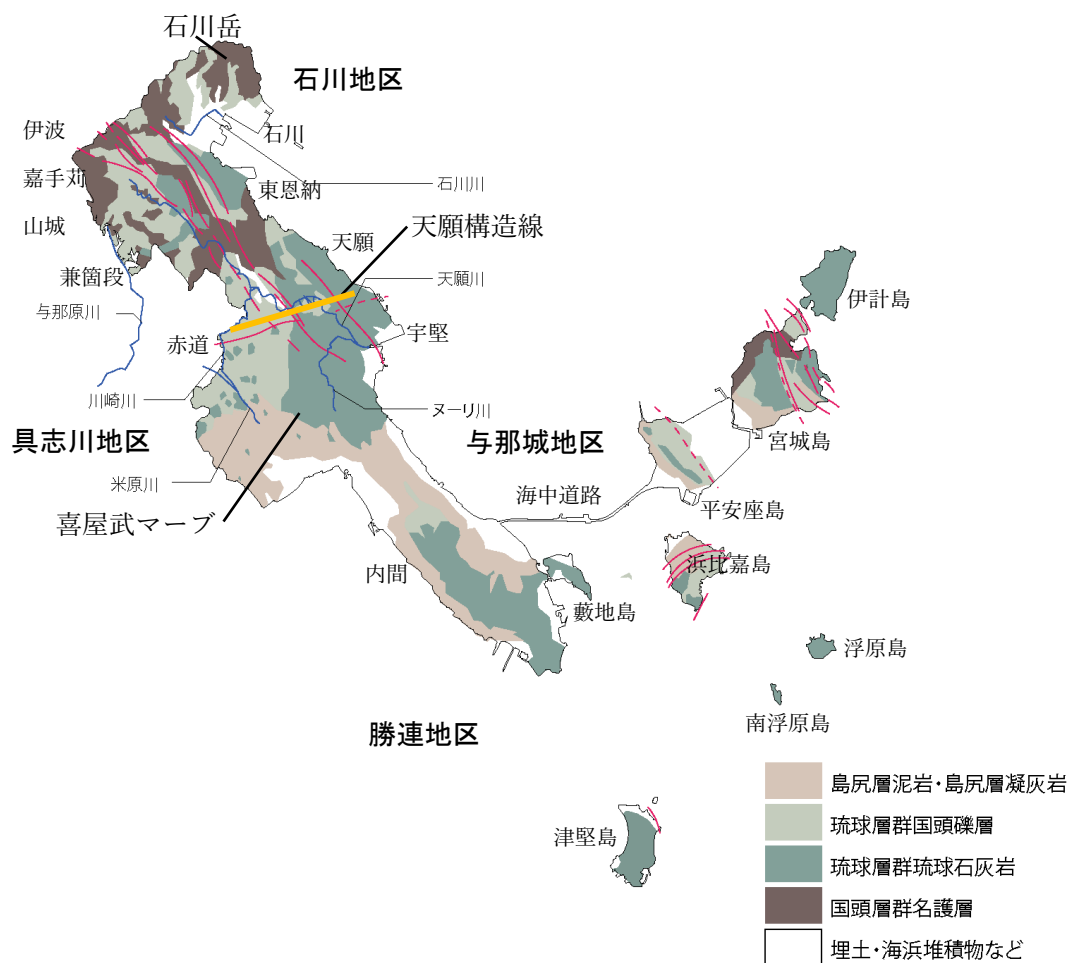


図4 うるま市の地質図

沖縄本島の北部と中南部という双方の自然環境をもっている点がうるま市の特徴である。河川は延長 11.9km、流域面積 31.61 k m²の天願川と延長 6.45km、流域面積 8.79 k m²の与那原川の二級河川がある。与那原川は沖縄本島西海岸へ流れる。さらに準用河川としては、ヌーリ川の延長 4.1km、流域面積 3.7 k m²と川崎川の延長 1.14km、流域面積 12.26 k m²と米原川の延長 2.8km、流域面積 1.40 k m²もある。それらの流域とカルスト残丘という自然環境がみられることから湿地と水田、湧き水などが多い。

勝連地区と与那城地区の勝連半島には、広大な干潟がある。

その半島は分水嶺を境に北側が緩やかな傾斜と南側が崖の地形となっている。その嶺は勝連地区から具志川地区へ続き、沖縄市そして北中城村から南部の知念半島まで連なっている。地質は主に青灰色でシルト質の泥岩と琉球石灰岩である。その泥岩と琉球石灰岩の海岸段丘やカルスト残丘を中心に湧き水がみられる。勝連地区の分水嶺では勝連城跡の標高 98mがひとつの目印になり、最高地が内間集落の分水嶺 116.6mがある。また、与那城地区は宮城島の高嶺遺跡付近の 124.8mもある。



照間のピーグ（藺草）



海中道路の干潟

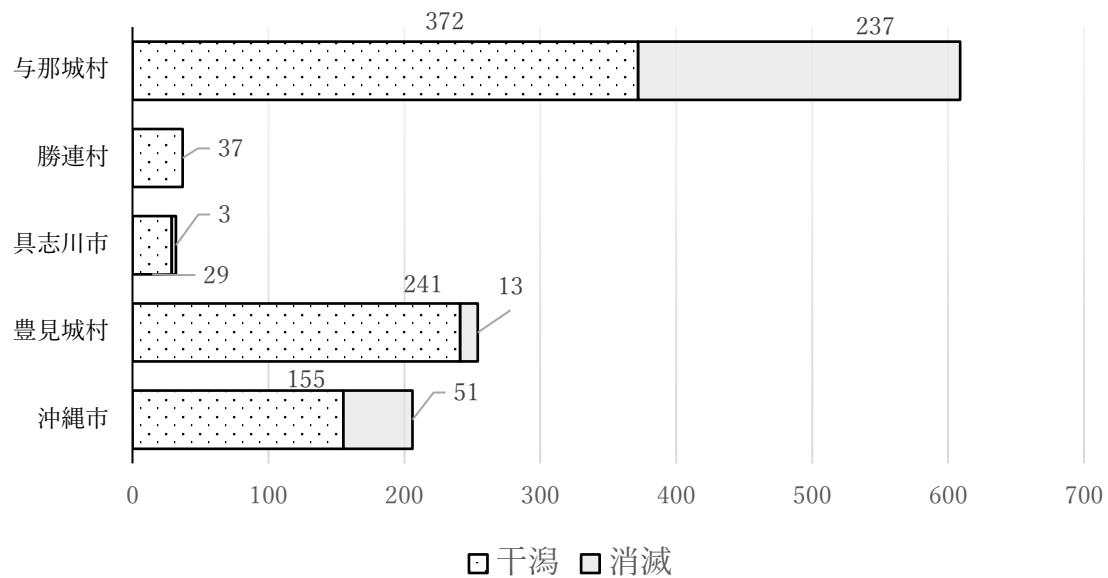


図5 沖縄島の干潟の面積上位（単位 ha）

うるま市は山と川だけでなく、海と島もある沖縄本島中部で珍しい環境をもっている。とくに海岸線の延長が沖縄島で2番目に長く、しかも干潟の面積が沖縄島最大の678ha（内消滅240ha）もある（図5）。当時の面積は1978（昭和53）年に沖縄県によって調べられたデータである。現在は干潟の消滅の比率が増えつつも干潟保有率で上位となる。

本市の陸地には畑地や湿地、水田、溜め池が残っており、湧き水も228ヶ所ある。

(4) 気候

気候は亜熱帯海洋性気候である。2021（令和3）年の月別の平均気温は16.3℃から28.2℃である。年間の降水量は約2,500mmであり、4月下旬から6月中旬までは梅雨時期、7～9月は台風時の襲来等による降雨量の増加がみられる（図6）。うるま市は年間を通じて温暖であり、動物も人も暮らしやすい気候である。

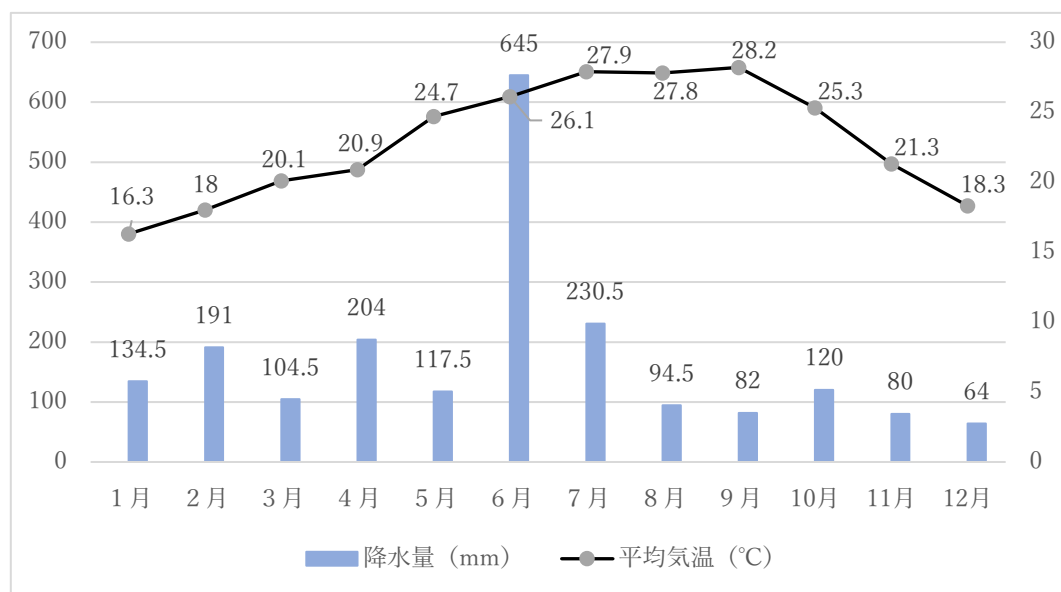


図6 うるま市における月別の降水量と平均気温
※気象庁データをもとに作成（観測地点：宮城島、2021年時点）



伊計島の平家の屋敷



照間の藺草を刈る作業

（５）景観

うるま市は景観法およびうるま市景観条例に基づき、『うるま市景観計画』（2012年：平成24年4月）を作成し、2017（平成29）年6月に改定した。それら全体の方針を「きづく→まもる→つくる→そだてる→いかす」と目標を決め、そのエリアを「石川エリア」、「具志川エリア」、「勝連半島エリア」、「海中道路周辺エリア」、「島しょエリア」と設定した。それらは国・県・市の指定文化財と関わり、伊波貝塚、安慶名城跡、勝連城跡、仲原遺跡、伊波城跡の自然、歴史文化の保存にあたっている。とくに国史跡指定の勝連城跡は、指定区以外にバッファゾーンを設け、建築の高さ制限等の規制に取り組んでいる。

島しょエリアは古民家や石造づくりの湧き水が多く残っている。歴史的風致の維持及び向上に関わる計画の余地もある。地形を掘削し、自然景観の観点よりも鉱石産地として知られていた琉球石灰岩のトラバーチン採掘場は、近世から現代まで地域の経済を支えている。それは産業景観も見ることができる。景観に関連する自然遺産群は、天願構造線一帯に連なるカルスト残丘の景色や勝連半島の南側及び北側に広がる干潟も景観の可能性が広がる。そのなかでも具志川及び照間の田地の農耕として残る藺草田は、文化的景観の要素として欠かせない地域の資源である。

２．社会的状況

（１）人口動態

うるま市の人口は年々増加しているものの、年少人口（15歳未満の人口）の減少と老年人口（65歳以上の人口）の増加がみられ、少子高齢化が進んでいる。

また、2015（平成27）年の国勢調査では、生産年齢人口（15歳以上65歳未満の人口）が減少している。

さらには1995（平成7）年と比較して世帯数は増加しているものの、1世帯あたりの人員は減少している。

うるま市における2024（令和6）年3月31日時点の人口は、126,454人で、県内市町村の3位である。2025（令和7）年を境に人口が減り始める。2060（令和42）年は、113,896人となる。

地域に残る歴史文化遺産のなか、とくに遺跡や有形の民俗文化財を管理する個人や世帯、自治会は少子高齢化によって2025（令和7）年以降、年々厳しくなると予想される。しかしながら、現段階においても少子化の影響で無形文化財や民俗芸能の保存会、青年会の継承人数は少なくなり、地域の社会的課題のひとつとなっている。

以上のことから歴史文化遺産の保存や維持管理、継承の課題等が浮き彫りとなっている。

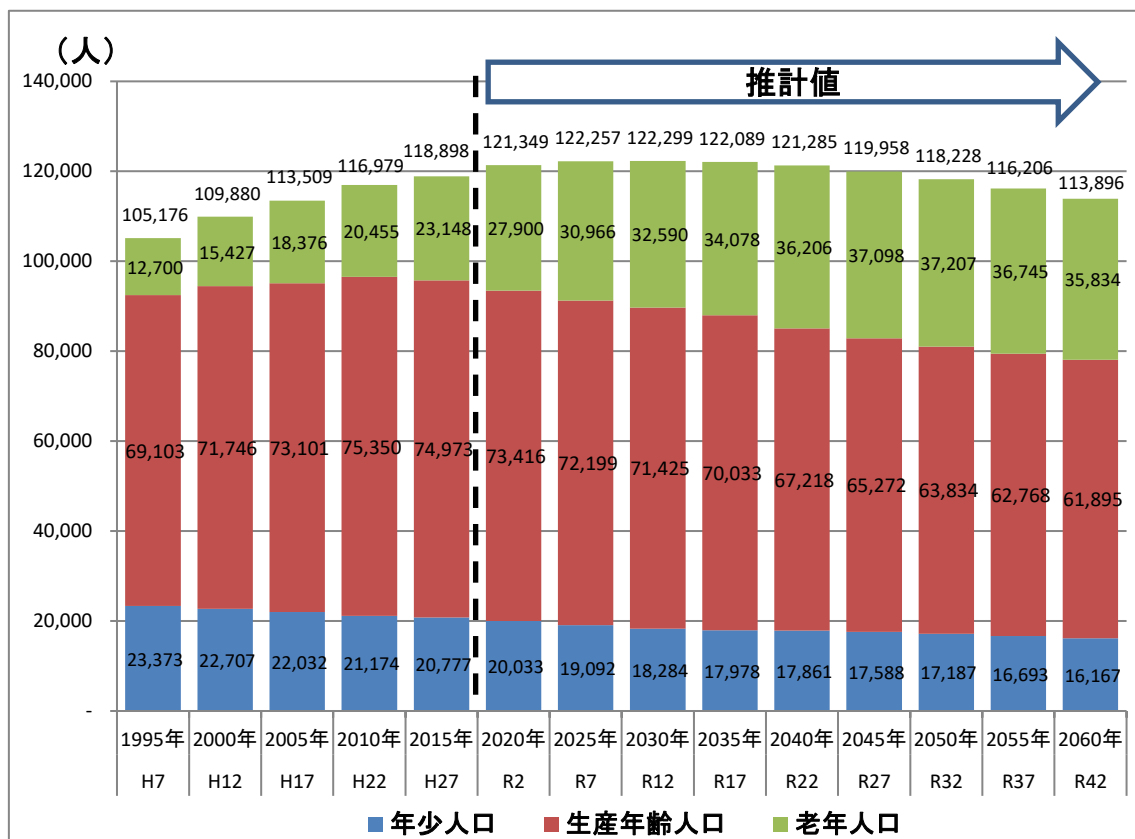


図7 うるま市の人口動態

※資料: 国立社会保障・人口問題研究所のデータより作成

(2) 産業

うるま市の産業別就業人口をみると、第1次産業及び第2次産業については1995（平成7）年度から一貫して減少傾向にあり、2010（平成22）年の国勢調査からは第3次産業も減少に転じている。また、2014（平成26）年経済センサス調査によれば、本市にある事業所数は4,560事業所で従業員者数が34,235人となっており、2012（平成24）年と比較すると、事業者数は1.1%減少しているが、従業者数は8.4%増加している。

うるま市の産業別市町村内純生産額の推移をみると、第1次産業は減少傾向、第2次産業は増減を繰り返しながらも全体的には増加の傾向にあり、第3次産業は増加している。2013（平成25）年度の市町村内純生産額は約1,670億円で、2005（平成17）年度の約1,499億円と比較すると171億円の増加となっている。

一方、歴史文化遺産に関わる産業に目を向けた時、景観の項目で紹介した具志川および照間の蘭草の生産は伝統的な生業である。うるま市の蘭草の生産は沖縄県内でも最大の作付面積と収穫高をもつ。

うるま市の観光施設は海中道路の海の駅あやはし館と世界遺産の勝連城跡周辺のあまわりパーク、海の駅 TERUMA などがある。その観光入込客数の記録が図8に示したとおり

である。2013（平成 25）年度は 388,185 人、2014（平成 26）年度の 352,134 人から 2019（令和元）年度の 317,357 人へと約 30 万人の観光入込客数を維持していた。しかし、2020（令和 2）年～2022（令和 4）年は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う県内外の移動の規制等により観光客数は激減した。

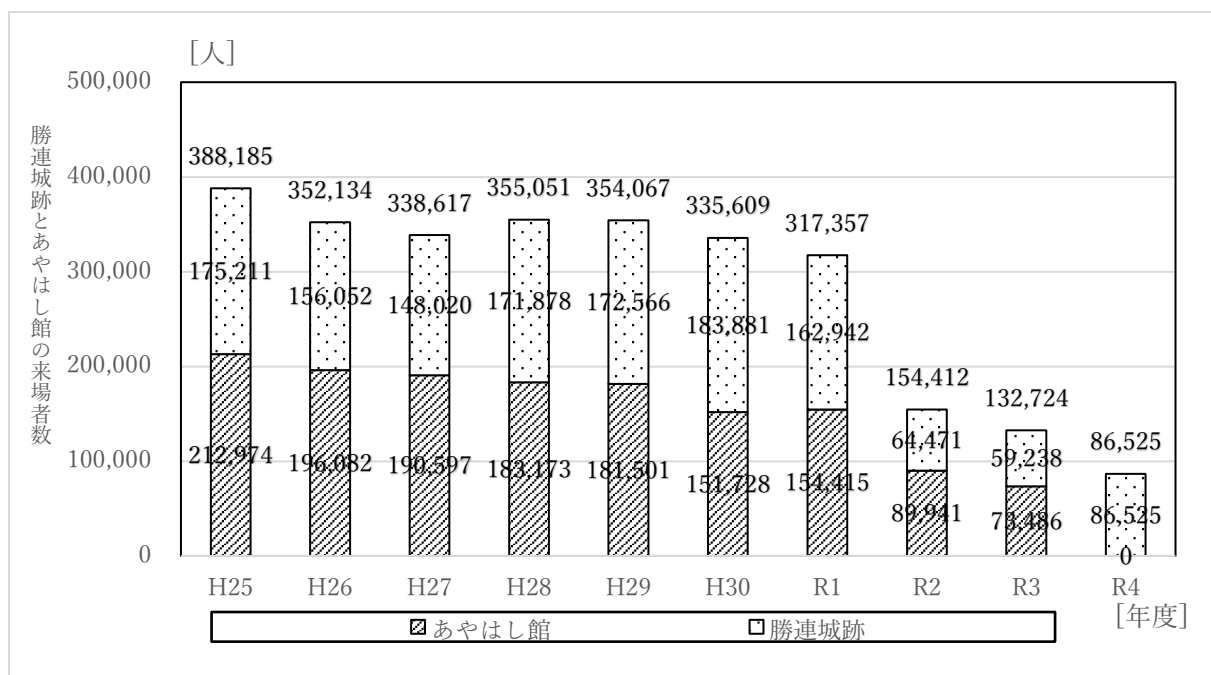


図8 うるま市の来場者数

（３）土地利用

うるま市の総面積は、87.02 k m²である。森林の面積は 2009（平成 21）年の 1,379ha から 2018（平成 30）年には 1,377ha に減少し、市の総面積の 15.8%を占める。

農地の面積は 2009（平成 21）年の 1,128ha から 2018（平成 30）年には 1,007ha に減少し、市の総面積の 11.6%を占める。ちなみに田は 2009（平成 21）年の 18ha から 2018（平成 30）年の 12ha へ、畑は 2009（平成 21）年の 1,110ha から 2018（平成 30）年の 995ha へ減少となっている。田は藎草が中心であり、タイモや稲作もある。畑はサトウキビを中心に花卉、にんじん、その他野菜、果樹が栽培されている。

以上の状況からうるま市の特徴は、農業などの第 1 次産業比率が低い都市型の産業構造であること、そして、平坦地や埋立地には大規模商業施設や工業施設などが進出している点があげられる。

（４）交通

本市は、国道と県道の主要道路が整っており、南部的那覇市や北部の名護市へのアクセスがしやすく、バスやタクシー、船舶などの公共交通も整っている。那覇空港から県

内各地へ行く高速バスが石川 IC と沖縄北 IC を通り、乗り降りできるだけでなく、路線の基幹バスが、市内の安慶名バスターミナル、屋慶名バスターミナル、東陽バス泡瀬営業所、石川東山バス休憩所と那覇市を結んでおり、沖縄本島の東西南北を周ることができる。島しょ地域への公共交通としては、民間会社が運営する「うるま市四島経由循環バス」があるが、津堅島へは基幹バスとフェリー船・高速艇が必要となる。基幹バスが通らない地域へは、「うるま市公共施設間連絡バス」で循環できるようになっている。

観光面において、世界遺産の勝連城跡や海中道路、島しょ地域等の観光地へのアクセスを向上させ、観光客数を増加させることは重要であり、本市では中部東道路や勝連半島南岸部道路等の整備を推進している。また、本市では『うるま市交通基本計画』（2017年：平成29年3月策定）の中で、図9のように観光客の動向やその視点により、バス路線を補完する交通手段と新たな交通手段、航路などの方向性を整理している。

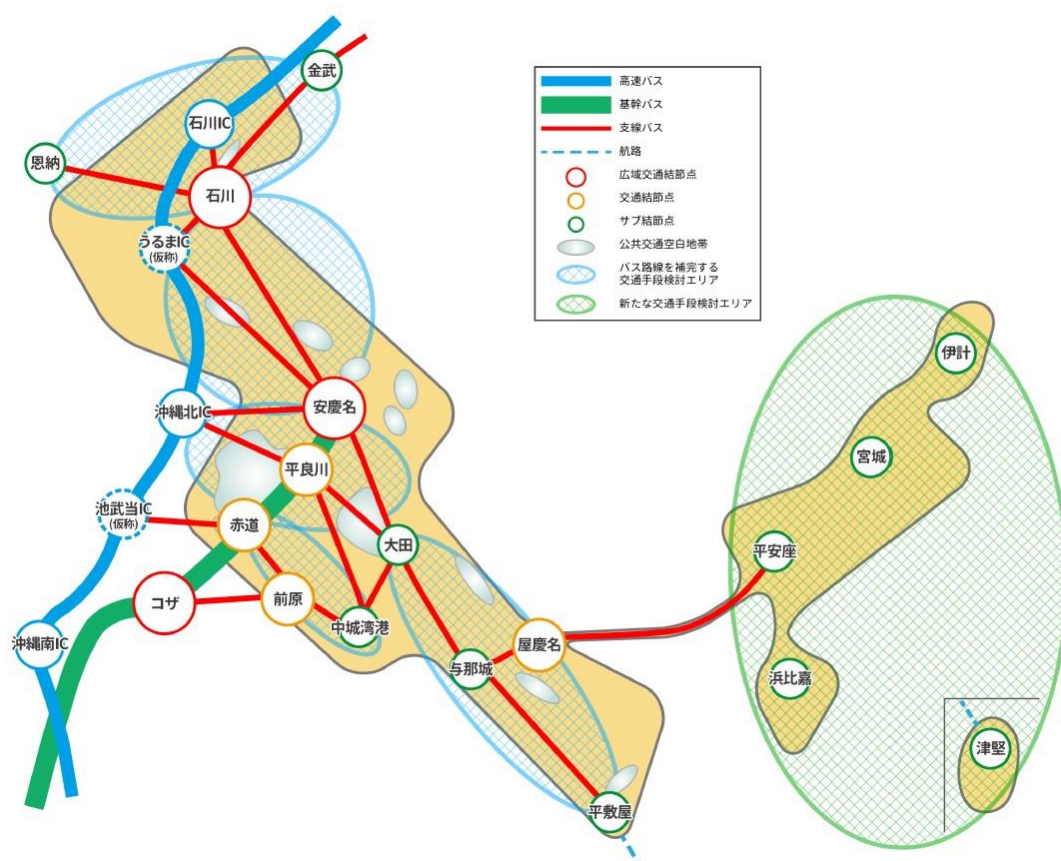


図9 うるま市の第2次交通の概念図



具志川バスターミナル



屋慶名バスターミナル



東陽バス泡瀬営業所



石川東山バス休憩所

3. 歴史的背景

(1) 先史時代（沖縄貝塚時代）

うるま市の先史時代は、1904（明治 37）年に鳥居龍蔵が発見した天願貝塚とチヌヒンチャの遺跡から人々の暮らしをみることに始まった。そのチヌヒンチャの遺跡を追いかけて 1920（大正 9）年に大山柏が伊波貝塚を調査し、『琉球伊波貝塚発掘報告』（1922 年）が刊行された。また、天願貝塚は、1931（昭和 6）年に天願小学校の教員であった多和田眞淳が校内のグラウンドの土手から土器を発見し、沖縄県の考古学界における本格的な活動が始まっていく。

うるま市のなかで最も古い遺跡は、藪地島の藪地洞穴遺跡である。2018（平成 30）年までの発掘調査では人骨が発見され、その人たちが使ったと思われる土器片や貝製品なども出土した。それにより、約 1 万年前の暮らしがわかってきた。今のところ沖縄県で沖縄貝塚時代の最古の人骨となっている。縄文時代の多くの遺跡は海岸段丘上に立地し、その周辺のカー（湧き水）付近に堅穴住居をつくり生活していた。一方、沖積低地に立地する平敷屋トウバル遺跡では海岸段丘上に立地する堅穴住居と同じく、海の自然遺物も多く出土し、自然豊かな場所で生活していた。とくに注目を集めた遺物は全国で初めて見つかった平敷屋トウバル遺跡の線刻画石柱である。その他にはサメの歯やジュゴンの骨、貝を加工した装飾品もあり、縄文時代の人々は海に依存した暮らしや豊かな精神文化をもっていた。そして、縄文時代から弥生時代にかけての生活は船を使った海上交通により生活圏を拡大させ、九州地方や大陸などと交易していた。



藪地洞穴遺跡



伊波貝塚



仲原遺跡



仲原式土器



漢式三角鏃など（宇堅貝塚）



指輪などの貝製品（宇堅貝塚）



線刻画石柱
（平敷屋トウバル遺跡）

(2) 中世＝グスク時代

沖縄県で使用しているグスク時代は約 1,000 年前の平安～鎌倉時代にあたる。この時代は鉄文化が導入され、稲作文化や牛、馬も海上からやってきた。稲作の場所を求めた人びとは、肥沃な土地と豊富な湧き水を探し求め、開拓しやすい立地を好んだ。その生活の場所が現在のうるま市内の古い集落に相当している。

グスク時代は社会的に大きく飛躍をとげる時期でもあった。南西諸島には政治的支配者である按司（あじ）が誕生した。彼らは勢力を広げるためにグスクを築いて土地と人民を支配し、有力者の存在として覇を競った。

石川伊波集落の伊波グスクは伊波（いは）按司が治め、安慶名グスクは二代目伊波按司の息子の安慶名（あげな）按司、喜屋武グスクは初代安慶名按司の四男の喜屋武（きゃん）按司が管轄した。一方、勝連グスクの按司は浦添グスクの城主であった英祖王系の大成王の五男が初代勝連按司となった。その按司の六代目に世継ぎがいなかったことから養子縁組より伊



勝連城跡



安慶名城跡



伊波城跡



勝連城跡出土のコイン



勝連城跡出土の
東南アジア陶磁器



勝連城跡北区の出土品



勝連城跡のウマチー行事



東恩納ノ口の勾玉

波グスクの伊波按司の六男が迎えられた。その後は七～八代の浜川按司や九代の茂知附（もちづき）按司の統治が続き、十代目の城主の阿麻和利（あまわり）が誕生した。それら按司たちは海という障壁をものともせず、海を交通路として切り開くことで貿易を活性化させた。

960 年、中国では宋が建国し、外国との貿易を振興させ、宋の商人たちが東アジアの各地に貿易の拠点となる居留地をつくり、華僑として発展していった。そうした日本の商人たちも海外との交易を広げ、東アジアの交易体制のひとつとなっていた。その影響は琉球諸島にもおよび、交易による物と人、情報、技術などの移動が活発化し、豊かな海洋国家をつくりあげた。グスクから出土した陶磁器は、中国や朝鮮だけでなく、東南アジアのフィリピン、タイ、ジャワなどの産物であった。ちなみに遺跡の城跡は石積みで整備された施設であり、人々は方言でグスクと呼んでいる。

勝連グスクの城主の阿麻和利が第一尚氏王統の尚泰久（しょう たいきゅう）王によって滅ぼされたあと、琉球は尚円（しょう えん）王が第二尚氏王となり、その息子の尚真（しょう しん）王が 1477～1526 年まで統治する。彼は職制と位階制を整え、各地の按司を首里に集め、王府の官僚として位置づけた。さらに聞得大君（きこえおおきみ）を頂点とする神女組織を整え、各地にノロを配置させた。その地方統治の強化を図りながら寺院の造営と仏教の興隆などの功績を残した。

（3）近世

近世琉球は、1609 年の薩摩の琉球入りから 1879 年のいわゆる琉球処分までの時期をさす。島津氏の琉球入り以後、薩摩の支配下におかれる琉球は様々な独自の改革を行っていく。1661 年に摂政になった羽地朝秀（はねじ ちょうしゅう＝尚象賢[しょう じょうけん]）は王府の機構改革や祭祀の改革、農政改革、水源地の整備、移民政策などを行い、それにあわせて島内の集落も移動させ、国を豊かにしていった。うるま市の勝連南風原や勝連内間、与那城屋慶名、与那城平安座、高江洲、石川、石川東恩納などの集落もフルジマ（古島）から移動したり、村々同士の合併で集落を形成したりと、グスクと集落の関係を強化した。その痕跡は現在でも歴史文化遺産のひとつとして集落の拝所（聖域な場所・御嶽）や伝統行事などで確認することができる。

沖縄最大の産業功労者として知られる儀間真常（ぎま しんじょう）は、中国から持ち帰ったサツマイモの栽培と普及に力を入れ、沖縄の農業に画期的な影響を与えた。儀間は 1623 年に家人を中国福建省福州へ派遣して砂糖の製法を学ばせ、自宅で製造を試み、国中に奨励して琉球の一大産物とした。うるま市も具志川地区を中心にサトウキビの生産が始まった。航海技術にたけていた平安座島の船乗りたちは、マーラン船などを使って沖縄島北部地域や奄美大島諸島より那覇へ砂糖などを運び、近世琉球の流通を支えてきた。一方、与那城間切と勝連間切は漁業で得た魚介類を琉球王府へ納めていた。

1644 年、琉球王府は異国船の往来が増え、その動向と事故の救助、航海安全などの理由

から各間切に烽火台を建て、烽火をあげて王府との通信をとるようになる。うるま市は沖縄島の中部東側に位置しているため、宮城島のヒータチ（火立て）、平安座島のアガリグスク、平敷屋のヒータティムイ、喜屋武マープのヒータチムイで烽火をあげていた。

薩摩の支配に入ってから琉球はしだいに政治が困難となり、1709年の大飢饉もあって3,199人の死者を出し、悲惨な暗い状況が広がっていく。過重な税を取りたてられた多くの百姓は借金にしばられ、支払いのできないものは一家離散し、奴隷のようにおちる者もいた。職を失い、人の世に対する悩みを抱いた脇地頭の平敷屋朝敏（へしきや・ちょうびん）は、1727年ころに領地の平敷屋集落へ行き、百姓たちが苦勞する姿や自分の心境を随筆『貧家記』のなかに和歌を書き残した。



宮城島の火立て跡



平敷屋集落のヒータティムイ



平敷屋朝敏の歌碑



朝敏の妻・真亀の歌碑

19 世紀のはじめ、イギリス海軍士官のバジル・ホールやフランス人宣教師のフォルカード、イギリス人宣教師のベッテル・ハイムらが琉球を訪れる。琉球王府は 1854 年にはアメリカと琉米修好条約を締結し、その後、フランス、オランダなどの諸国とも条約を結ぶ。

一方、琉球国内の社会において 18 世紀から続く多額の借金を抱えている首里王府は財政が厳しかった。王府の財政を支える農村では、たびかさなる干ばつや飢饉があいつぐなか、疱瘡などの伝染病の流行によって農民も疲弊していた。王府はこうした間切や農村へ役人を派遣し、村の立て直しに勢力をそそがなければならない状況であった。

伊計親雲上（いけい ぺーくみー）と呼ばれた脇地頭の蔡大鼎（さい たいてい）も王府から父が拝領した伊計村を訪問し、とどこおっていた年貢の様子をみた。その時に生まれた漢詩集が『伊計村遊草』（1849 年）であった。

（４）近代

日本全国の藩を廃した 1871（明治 4）より 8 年後の 1879（明治 12）に沖縄は廃藩置県となった。しかし、版籍奉還の手続きも踏まなかったことから琉球処分という形でおこなわれた。そこで、近世の支配身分をもっていた士族は、沖縄本島の農村地域に帰農する。うるま市はおもに具志川地区に士族が開拓した集落が展開し、サトウキビ、蘭草の栽培、養豚業が営まれた。近代社会の沖縄であっても、近世琉球の土地交換や農業の在り方は家単位で 1903（明治 36）年頃まで使用されていた。

石工たちは、本州の山口県や兵庫県からやってきた。彼らは加工が容易でない硬質の勝連平敷屋のトラバーチンを求めた。工学の武田五一博士は日本政府の国会議事堂建築石材の調査のため、1929（昭和 4）年に沖縄県へやってきた。勝連平敷屋のトラバーチンは、武田博士の目にとまり「ウルマ石」と名づけられた。2 万個のトラバーチンが国会議事堂の表玄関に使われた。その後、正金銀行、三菱信託、大丸、松坂屋、十合、高島屋、関西大学、料亭いろは、阪急、阪神、とくに戦後の皇居の大広間壁面を飾るトラバーチンは華麗にして優雅であったといわれている。

大正と昭和の時代は日本政府が東アジアや東南アジアなどへ統治下を進めていた。そのころの社会は不況であり、生活に困っていた沖縄県民は海外の東南アジアのフィリピン、サイパン諸島、ハワイ、南米などへ移住する人が増えていった。うるま市も同じ道を歩む人たちがいた。

太平洋戦争にともなう沖縄戦では、1945（昭和 19）年に勝連南風原の集落と津堅島の地上戦が起こり、多くの人命や家屋などを失った。沖縄県内で 20 万人以上の命が奪われた。その年の 8 月 15 日、日本政府はポツダム宣言を受け入れた。アメリカ海軍は、沖縄島各地の収容所より県民のなかから有識者百数十人を石川収容所に集めた。そのなかから 15 人を諮詢委員会の委員に選び、8 月 20 日に沖縄諮詢会堂が設置された。その委員長は、赤道出身の志喜屋孝信であった。その後、1946（昭和 21）年 4 月 24 日に沖縄民政府が創立され、志喜屋孝信が知事に就任し、石川東恩納の集落へ移った。

うるま市の石川は政治だけでなく、商業地や学校、銀行などがととのえられ、東恩納博物館（沖縄県立博物館）も開館したり、沖縄県内初のエイサー大会が開かれたり、文化芸能のまちとしても中心地となっていった。いわゆるうるま市の石川が戦後沖縄の復興の地といわれるゆえんである。

（５）現代

アメリカ統治下では、基地に隣接する農村が急激に都市化へと変貌を遂げた。建築では、アメリカ製のコンクリートブロックや資材が導入され、強固な建造物としてアメリカ住宅や石川ビーチ、保養所施設、ダム、CTS（石油備蓄基地）、海中道路等が整えられた。経済・産業では危機に瀕していた養豚業の復興を目的にアメリカ本国より 550 頭の豚が送られ、食と農業の改善だけでなく、金融業も活性化させた。

祖国復帰後はスポーツと芸能、暮らしの向上を図り、石川白浜公園や島しょ地域の橋の建設、体育館や石川多目的ドーム（闘牛場）、野球場、うるま市民劇場等の建設が進められた。現在でもエイサーまつりや音楽祭、闘牛大会、うるマルシェを活用した産業まつり等で農産物・魚産物の食文化と芸能文化を活かした体験型のまちづくりが続けられている。

うるま市は沖縄県的那覇市、沖縄市に次ぐ第3位の人口約 12 万人の都市となっている。うるま市は 2005（平成 17）年 4 月 1 日に石川市、具志川市、勝連町、与那城町の 2 市 2 町が合併して誕生した自治体である。



平敷屋製糖工場跡



アメリカ県人会から届いた豚



天願獅子舞



伝統エイサーの郷